

## 《解説》

鶴戸 聡

ムハンマド・ベッラーダは一九三八年、モロッコの首府ラバトに生まれ、フェズで幼年時代を過ごした。植民地末期に独立運動派の学校で教育を受け、一九五五―一九六〇年にはエジプトに学び、カイロ大学でアラブ文学の学士号を取得する。

留学中の五六年に独立を果たした祖国に帰るとムハンマド五世大学(ラバト)で哲学を学び、しばらく放送局で働いた後、また大学に戻ってアラブ文学を講じることとなる。最終的には七〇―七三年に、アラブ文学研究の大家アンドレ・ミケルの指導のもと、ソルボンヌで博士号を取得した。

小説家としては七六・八三年にモロッコ作家連盟の会長も務め、その後はブリュッセルで創作に専念している。妻はフランスを始めヨーロッパ各国でパレスチナの代表を務めたレイラー・シャヒード(名家フセイニー一族の出身でヤセル・アラファートの従妹に当たる)である。

モロッコを代表する小説家であり、とりわけ「アッタジュリーブ」と呼ばれる

実験的な文芸潮流の中心人物として、ストーリー性の低いコラージュ的なエクリチュールを追求した。また新造語や方言の導入など、言語的な実験性も見られる。多作な作家ではないが、作品のフランス語訳が数点あり、代表作の『忘却のゲーム』(一九八七)は英訳も出版されている。

文芸批評・文学理論の面でも著名であり、ロラン・バルトを始め、ヌーヴェル・クリティックの翻訳紹介を行うほか、エジプトの批評家ムハンマド・マンドゥール(一九〇七―一九六五)について博士論文を提出している。彼自身の創作も、このような文学理論、あるいはカテブ・ヤシンの『ネジュマ』(一九五六)以降のマグレブ伝語小説や、フランスのヌーヴォー・ロマンなど、旧来の小説を解体するような文学実践から大きく影響を受けているだろう。

本作品は、モロッコ社会の麻痺的状况を、単なる失業問題としてだけではなく、人々の思考停止や逃避として、さらには政治的な意識を持つこと自体からの疎外として批判したもので、超現実的な奇想と悪魔的な権力者像がラテン・アメリカ文学的な色彩を放っている。

マグレブの伝統的なパフォーマンスであるハルカ(環)は、その名の通り、人々の環の中心で行われる芸能だが、作品中では「民衆」を象徴する意匠となっている。折しも(七〇年代)隣国アルジェリアでは、このハルカやベトナムの村芝居チエオの影響を受けたカテブ・ヤシンの、民衆に直接語りかける口語アラビア語演劇運動を開始していた。

民衆に対置され、「斬られた首」のハルカを中止させるのが「時の支配者」「マフゼン」と称される政治権力であり、独立後のモロッコ政府は実際のところ、植民地当局と結託していたベルバグダーディーと表裏一体なのである。終盤の裁判に象徴されるように、「裁くり支配する」(ハーカマ)という動詞が主権者たる「判事(支配者)」(ハーキム)の本質であり、その裁きによって人々は舌を斬り落とされているのである。